

【今回の訪問について】

現代福祉学部の国内研修制度を利用して、今年の夏、秋田県藤里町へ訪問することができた。福祉コミュニティ学科の3年生は、ソーシャルワーク実習のため夏季休暇の際に固まった時間が取れないことが多いが、自分はソーシャルワーク実習の時期が9月末からなので、無事行くことができて幸運だった。今回の藤里町訪問で、サークル活動と個人的な訪問を合わせて、私は4回藤里町へ行き続けていることになる。藤里の社協の職員方には驚かれた。顔なじみの人も増え続けているし、名前と顔を覚えていてくれるのは、何よりも嬉しいことだ。誇らしいとも感じる。しかし、悲しいことも当然ある。以前に交流したことのある人が、認知症が進行した様子であったり、体に障害を抱えてしまったり、居なくなってしまうことがあった。一つの地域を見守り続けていくことは、関係の形成や、活動の進展による高揚感との裏腹に、どうしてもできない悲しいことが必ず付き物だ。そういった現実から学び、そして考え続け、自分達の立場からできるケアの在り方を改めて問い直し、藤里町社協が社会福祉協議会としての実践している取り組みを職員の方々から見て学び取ることができた。年に一度、又は二度の訪問で見えてくるものは非常に断片的である。ましてや、自分達はボランティアであるので、どれだけ活動の域を展開させようとも、関われる事柄は限定的で局所的である。だからこそ、学内や、専門演習のフィールドワークなどで学ぶべきことは多い。専門的な知識を学び、藤里町の社会問題、全体像の把握に努めようと思うことが、関わる住民の方々を真に理解し、心から繋がることになるのではないかと私は考える。今回の訪問でも、また一つ藤里町の新たな断片を目視することができ、自分の中にある藤里町の理解大きく進展させられたと思う。また、偏に福祉の勉強に留まらず、新たな価値に触れることができたのではないと思う。以下でそれに触れたい。

【藤里町の活動の中で学んだこと】

今回、初めて「宝昌寺」というお寺に宿泊させていただいた。毎回「土佐旅館」という民泊を利用させてもらっているのだが、宿泊料が異常に安かったことと、藤里町社協の紹介もあり「宝昌寺」に泊まることを選んだ。「土佐旅館」の人たちは、顔なじみといった関係なので、あえて宿泊先として選択しないということに引け目を感じた。よって、「冬の訪問の際には、必ず泊まる。」という気持ちと、「今回、あえて別のところに宿泊することで、何か新たな発展があればいいな。」という気持ちがあった。しかし、宝昌寺に宿泊する選択は、結果として大当たりだった。住職さんは、私たちにとっても親切にしてくれた。何度も私たちに経験談や説法をしてくれ、朝早くに私たちを起こし、座禅までさせてもらった。福祉という枠外であるが、自分にとって今までない経験になったと思うし、自分のなかにある問題意識も変化したように感じる。お坊さんという独特の死生観を持つ人と話すことで、新たな価値を体験できた。私は、アルバイトやボランティアで高齢者施設に関わらせてもらっていることが多く、そこで実際に見たことがあるわけではないが、人の死につい

て考えざるをえなかった経験が何度かある。人の死について、新たな価値観を取り入れることで考えねばならないことも多くなったが、考えることに大きなヒントが与えられた。

また、若者井戸端交流会に参加することで、1つの地域を調査するという目標が大きく前進した。具体的に言えば、地域住民の関係性が見えてきたことである。大雑把に言うと、私は高齢者支援を主に考えており、藤里町に来てから話す人も大半が高齢者になってしまう。今回は、局所的であるが地域の現役世代の方と話す機会が多く持てた。「あの人は、社協の〇〇さんの中学校の時の後輩で～」といったふうに、住民同士の関係や、結束といった側面も見ることができた。当たり前な話なのだが、町で活躍している現役世代の人たちと話すことが、地域の理解には必要不可欠である。若者井戸端交流会では、そのことを改めて認識させられた。今回の研修のテーマである「グリーンツーリズムから学ぶ。」ことに沿えたものになった。

藤里町社協の局長さんが、自分たちのためにと講義をして下さったり、ボランティアアンケートを書かせてもらったりと、藤里町社協が私達の今後のためにとして下さったことも多く、大きな学びに結びついていくと思う。今回交流できたことで、私達学生と顔なじみの人も増えることになり、次回の訪問が、双方さらに期待できるものになればと思う。また、自分達が期待に応える様に、傾聴技法の上達とボランティアとしての成長が出来ればと思う。フィールドワークや日々の学習から、福祉の活動を行う一員として成長していきたい。今回の活動では、大きく前進でき、課題や問題意識も得ることが出来た。

【今後に生かせるよう】

今回の訪問でも、貴重な体験ができた。地域住民の方達の温かみを充分すぎるほど感じた。住民や利用者の方に、あと何回会えることができるのかを考えると胸が痛くなることもある。藤里町が自分の第二の故郷であると思うし、もし何か災害などがあれば駆けつけたい。そこで、自分達以外の何人もの学生がこの様な活動をすることで、世の中は大きく変わるのではないかと考える。ボランティアなどの経験を通して個々に問題意識を持ち、「自分が何かしなければ」と思うことが、現代の社会問題の解決の糸口になるのではないかと考えている。私たちは、学生であるし、ボランティアで1人1人の力は微弱なものだが、活動が合わされば大きな波を起こすかもしれない。今、自分に出来ることは、ボランティアに行くことで得たものを、自身の中で成長させ、まだ体験していない人達に伝えることと、参加を誘うことだ。理想論や、楽天的な考えかもしれないが、続けていけば良い方向に変化が起こせるのではないかと思う。

また、私は9月末頃からソーシャルワーク実習で調布市社会福祉協議会に実習に行く。同じ社会福祉協議会でも、秋田県の藤里町という所と、首都である東京の調布市とではどう違うか、地域の特性は何か、どういった取り組みが行われているのか、高齢者や引きこもりの方の割合など、比較し、検討することで、どちらの地域もより深い学びが可能になると思う。次回で、サークル活動としての秋田県藤里町の訪問が10年目である。改めて考

えてみると、何年も継続して1つの地域に生き続けることはかなり困難なことである。4年経てば、サークル内の人間は一変するし、サークル員の人員確保での苦勞もあるし、お金を払ってまで秋田県にボランティアに来てくれるような学生は多くはない。これまで活動が続く様にしてくれた上級生と、毎年迎え入れてくれている藤里町に多大な感謝と尊敬の気持ち一杯だ。今後の活動のためにも、自身の知識を深め、そこから見えるものを下級生に伝えていきたいと思う。自分が藤里町で見てきた魅力を、下級生には感じて欲しい。また、それ以上の魅力が見えてくることと、藤里町に継続して返礼ができ続けることを強く願う。